

出品作家略歴

【日本画家・滝沢具幸—作家インタビュー公開記念】

滝沢具幸（たきざわ・ともゆき、1941-）

長野県飯田市生まれ。東京藝術大学を経て、1966年に同大学院修了。在学時より新制作協会展に出品、受賞を重ねる。法隆寺金堂壁画再現模写事業、東京藝術大学中世オリエント遺跡学術調査に参加し、創画展をはじめ、グループ展などでも活動。1974年からは創画展で創画会賞を連続受賞、1977年に同会会員となる。1985年、「地の会」結成に参加。1987年、武蔵野美術大学教授となり、現在は名誉教授。2006年から2024年3月まで飯田市美術博物館館長を務めた。

渡辺学（わたなべ・がく、1916-2000）

千葉県銚子市生まれ。本名、冨雄。1936年東京美術学校日本画科に入学、結城素明、川崎小虎らに学び。1949年第2回創造美術展に《校庭》が初入選。1957年第21回新制作展《網》《廃船》、1959年第23回展《海苔とる浜》がともに新作家賞を受賞、1960年第24回展に《加工場の午後》等を出品し新制作協会会員となる。1965年マヤ遺跡研究のためメキシコに滞在。1974年創画会発足に参画、以後創画展に出品。1985年には窪島誠一郎の呼びかけにより結成された「地の会」にも参加。亡くなるまで銚子に住み、そこに生きる漁師やその家族を題材に作品を制作した。

大森運夫（おおもり・かずお、1917-2016）

愛知県八名郡三上村（現・豊川市三上町）生まれ。1937年愛知県立岡崎師範学校卒業。しばらく教員を務めるが、1950年新進作家の中村正義と交流、日本画を描き始め、1951年第15回新制作展に《校庭》が初入選。1958年中部日本画総合展最高賞受賞。1975年第3回山種美術館賞展大賞受賞。1974年には創画会結成に参加、以後会員として活動する。1985年、創画会中堅会員だった池田幹雄、滝沢具幸、渡辺学ら7名と「地の会」を結成。土俗祭儀、人形浄瑠璃、破損仏などモチーフを変えながら、それぞれのモチーフに納得のいくまで取組み数多くの作品を制作した。

【没後70年 菊池契月】

菊池契月（きくち・けいげつ、1879-1955）

長野県下高井郡中野町（現・中野市）生まれ。旧姓は細野、本名は完爾。児玉果亭に学んだのち京都へ向かい、菊池芳文に入門する。1898年の新古美術品展に出品した《文殊》が褒状一等を得る。1908年の文展で《名士弔葬》が二等賞を受賞すると、以降も受賞を重ね文展、帝展の審査員も務める。1922年から1年間欧州視察に派遣される。1925年、帝国美術院会員となり、1934年には帝室技芸員に任命される。晩年は平等院鳳凰堂の壁画模写の監督指導を行う。

【田村一男、桜井寛—油彩画コレクションから】

田村一男（たむら・かずお、1904-1997）

東京生まれ。1924年本郷絵画研究所に入所。同年、研究所で知り合った彫刻家・矢崎虎夫の実家に近い蓼科高原を訪問、信州の雄大な自然に感銘を受け、信州の山岳や高原を多く題材にするようになった。1928年、《赤山の午後》で帝展に初入選。1931年の第18回光風会展での入選により、画家の道を決意し、以降光風会展や日展に出品。1980年、日本芸術院会員となると翌年には光風会理事長に就任。1992年、文化功労者に選ばれる。

桜井寛（さくらい・ひろし、1931-2025）

長野県南佐久郡臼田町（現・佐久市）生まれ。中学時代、東京から疎開・移住してきた画家に刺激を受け画家を志す。1951年東京教育大学（現・筑波大学）在学中に独立美術協会展初入選。以後独立展への出品を続ける。1958年三鷹市に転居しアトリエを構える。1963年および1966年独立展で独立賞受賞、1967年独立美術協会会員となる。牛や作家の周辺にある日常の静物、また人物や風景などをモチーフに制作し、独立展を中心に発表を続けた。独立展のほか1971年から1974年にかけて安井賞展に出品。